

電柱・街路灯等の色彩考

杉山朗子

日本カラーデザイン研究所 研究フェロー
(113-0033東京都文京区本郷3-5-2-6F,E-mail:shanshanlangzi1616@gmail.com)

電柱や街路灯等の色彩は、一般的にはあまり注目されることが少ないと思われる。しかし、歩く人々に心地よい空間を提供する構成物の一つとして重要である。ここ15年で住宅街や商店街などで見られた街路灯の色彩の変化などを観察しながら、再考してみたい。

キーワード: 景観色彩, 周辺の色, 電柱, 街路灯, 商店街, 住宅街

1. はじめに

(1) 電柱・街路灯類の色彩の影響

はじめて電柱・街路灯の色彩の、景観への影響を感じたのは島根県の宍道湖畔であった。静かな湖沿いを走っていると突然焦げ茶の道路照明灯が聳え立ち、バスの窓越しに次から次へと目に入ってきて、のんびり眺めることができなくなってしまったからである。2000年代に電線の地中化の取り組みが広まる中、東京の住宅街及び弘前市の中心商店街の事例を見る機会があった。住宅街では戸建て住宅の屋根より高いため、空が背景となり、その暗い色がのしかかってくるようであった。商店街では、電柱類の林立で、見る角度によっては店舗の前を塞いで見えなくしてしまいそうになり、観光客としての目線からは圧迫感に驚かされた。この整備は竣工後のアンケート調査で、歩きやすくなって良かったと報告されているので、便利で快適になったと評価されている事例である。



図-1 2009年弘前市中土手町

(2) 電柱・街路灯類の色彩の変更事例

東京都の住宅街の例では、地中化の整備後、数年して色の変更された。実際の変更経緯・年度は確認していないが、2021年再確認した際には、塗装によって変更したことがよくわかる褪色がみられたが、変更後の色の継続であ

った。住民からの要望などがあった結果かと思われるが、古くからのお屋敷町らしい穏やかさ、落ちつきが保たれたのではないだろうか。



図-2 東京都文京区 2008年→2021年

この事例のように、電柱類の色彩は、周辺の建物の状況などとの関係や地域の特徴に合わせて検討するステップがあっても良いように思われる。そこで、次に周囲との関連などについて観察した事例を挙げてみたい。

2. 色彩検討のための観察と分析

(1) 明度差に着目した画像解析

色彩の調和理論は様々あるが、電柱類の色彩の違和感、周辺から突出しすぎる点ではないだろうか。周辺の建物より高く聳え立って、背景となる空より暗い色が連続する場合や、電柱などが太い場合に連続するとブラインドのように見る角度によっては面になって見えるという効果を形成してしまう場合であろう。そこで、明度の分布を確認する分析を行ってみた。画像に含まれる色の明度や彩度を解析するソフト—SCENE_マンセル版_日本カラーデザイン研究所、を用いた。分析としては色相&トーン

分析¹⁾の項目を使用した。

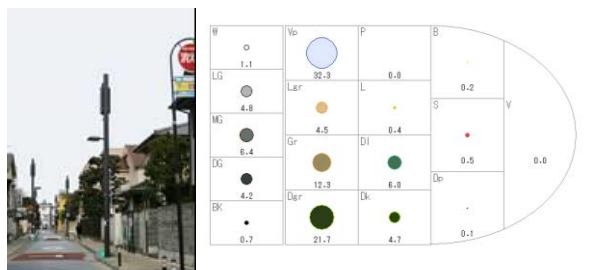


図-3 東京都文京区2008年 色相&トーン分析



図-4 東京都文京区2021年 色相&トーン分析

2008年の電柱が暗い色の状態では、見えている空間の2割以上がダークグレイッシュトーンで占められて、曇り空のやや明るいトーンとのコントラストが大変強いことがわかる。それに対して、2021年のやや明るめのグレイッシュなカラーに変更した状態では、周辺の建築物等の色彩と相まって、全体が明るくてグレイッシュなトーンで4割以上となり、全体に穏やかな空間を形成していることがわかる。

3. 近年の条件の異なる地域での事例

(1) 基本整備が進む地区と商店街等の地区の比較

東北大震災復興が進む地域のいくつかを見学をさせていただき、基本的整備が進んでいる地区と、建物が残ったり商店街等の地区での電柱や街路灯の色彩傾向が異なっているように感じたため、現状の確認をしてみたい。

なお、ここでは、具体的な地域の課題としてではなく、利用する人が目にする空間を構成する色彩の傾向、特に明度の比較という点に着目しての報告としたい。具体的な色彩検討の際には地域性・地元らしさなどを考慮した調査・研究が重要であると思われるが、ここでは、そのようなデータや研究に沿った内容ではないことを確認しておきたい。

a) 基本整備が進む地区

新しい施設などが建設されて、活用が進む地区の特徴を見てみよう。

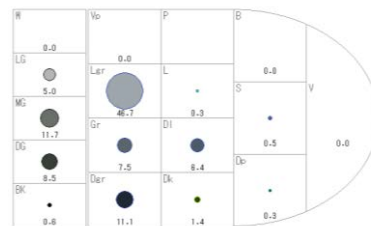


図-5 基本整備が進む地区 色相&トーン分析その1

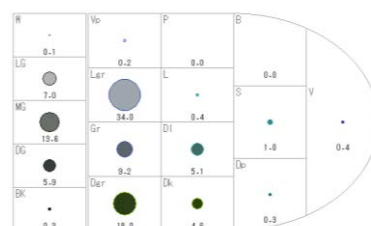


図-6 基本整備が進む地区 色相&トーン分析その2

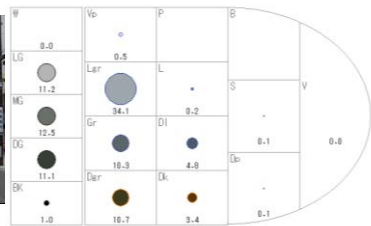


図-7 基本整備が進む地区 色相&トーン分析その3

どの画像も黒に近いトーンが2割以上を占め、また明るいグレイッシュな周辺との対比が大きいことが分かる。

b) 建物・商店街のある地区

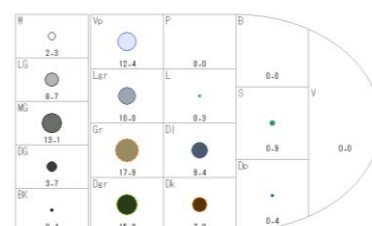


図-8 建物・商店街のある地区 色相&トーン分析その1

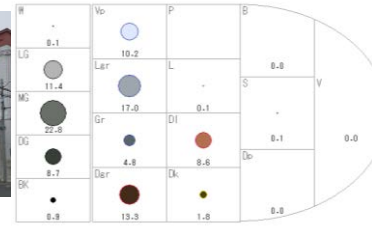


図-9 建物・商店街のある地区 色相&トーン分析その2

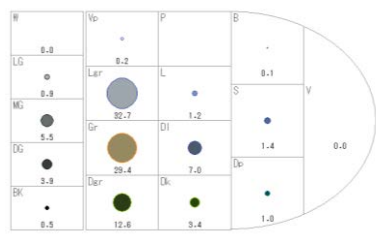


図-10 建物・商店街のある地区 色相&トーン分析その3

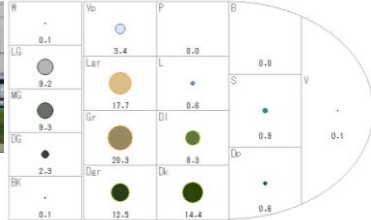


図-11 建物・商店街のある地区 色相&トーン分析その4

周囲に古い建物が残る地区もある。並木や植栽なども見られる。街路灯には、非常にダークなトーンは用いられてはおらず、建物の外壁色とともに、明るめから中くらいのグレイッシュなトーンが中心、という共通の傾向がみられる。穏やかなまとまりを感じさせる色構成である。色相に関しては青系や緑系など様々であり、商店街ごとの要望や設置した時期によって違いが出ているのかと思われる。

c) 自然景観が背景となる地区

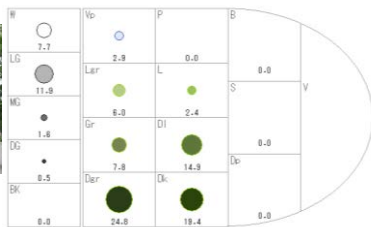


図-12 自然景観が背景となる地区その1

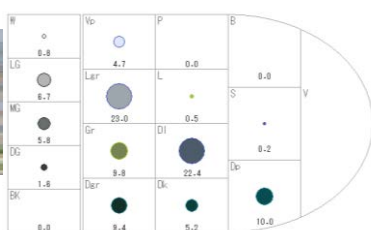


図-13 自然景観が背景となる地区その2

自然景観の場合は、自然の色を重視し、その土地の樹種の葉の色や幹の色などを検討要素に入れる場合もある。

ここでは、背景となっている葉の色よりも明るく目立

つため、幹の色などを参考にした明度のものを選択する方法も、まとめ感としては効果的であろう。

4. 電柱・街路灯の色彩の使われ方の傾向と今後

(1) 電柱・街路灯の色の使われ方

基本整備が中心の地区では、ダークグレイッシュトーンが用いられていた。規模は違うが、ソフト地中化の事例と同様な色彩で、ダークな色が基本的に使われているようである。一方、商店街等、周辺にまちを使いこんできた人々がいる場合は、中明度・低彩度の色彩が使われている傾向が見られた。近くに人の生活があるかないかで変わってくるのではないだろうか。

今回、色を確認するきっかけとなった住宅街の地中化に伴う新しい電柱の色の塗替えも、そのまちに住んでいる人々が、毎日の生活の中で、低明度トーンは避けたいと感じた結果だと思われる。

あまり意識されていないかと思っていた電柱・街路灯の色であるが、人々はそれらの色の変化の機会に出会うと、生活環境の雰囲気が変わったと意識するといってもよさそうである。

(2) 電柱・街路灯の色彩の今後

電柱・街路灯は基礎的な設備であるため、基本的に用いられている色や多く使われている色を使用するのが一般的かと思われる。しかし、変更したりする事例や、使われ方の異なる事例を見ると、そこで生活する人々の意見を取り入れることも必要かと思われる。新しい開発や整備などで意見収集が困難な場合でも、近隣・周辺の事例などを観察・収集し、使われている色彩の傾向などを整理して参考にする方法なども考えられよう。

明度の検討だけでも効果があるが、今回再確認を行った住宅街の例では、周辺の建築等より赤みによる色相が用いられていることが分かった。色相も、周辺の既存の建築物等の傾向を捉えると、検討しやすくなるであろう。



図-14 建築物より赤みの強い柱の色

「参考文献」

- 1) 日本カラーデザイン研究所 杉山朗子, 田村真知子, 宮岡直樹, 滝沢真美「地域イメージを活かす景観色彩計画」学芸出版社2008年 p.154NCDヒュー&トーンシステム